2009年度 修了

自閉症スペクトラム幼児のごっこ遊びの一考察
－ プレイセラピー場面での遊びの比較分析 －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
橋本　奈緒子

本研究では、３～４歳ごろの発達段階の自閉症スペクトラム幼児の遊びについてどのようなテーマの遊びがみられたのか、またそれぞれのテーマの遊びの質的変化について分析した。そして、人形を使った遊びを取り出し、それらの遊び方の変化とセリフに着目し検討した。

まず、一人の自閉症スペクトラム幼児の１年６ヶ月間のプレイセラピーで見られたすべての遊びを、テーマに基づいて分類し、カテゴリー化した。その結果、７種類のカテゴリーが取り出され、さらに特徴的な遊びを４種類のカテゴリーに分けた。それらの出現傾向についてまとめ、各カテゴリー内の質的な変化を整理した。また、描くカテゴリーの人形を使った遊びの出現傾向についても示した。

次に、人形を使った遊びのみを取り出し、人形をどのように操作して遊んでいるのかについて分類した。それらの出現傾向と質的変化について検討した。さらに、セリフの特徴についてその出現時期をまとめた。

以上の分析をまとめ、６ヶ月ごとに３つの時期に分け、各時期の特徴を検討した。その結果、前期は、見立て遊びや玩具の用途に基づいた遊びなどが活発にみられた。また、行為と行為が繋がり、特に日常生活の再現遊びは、より長いスクリプトになり、初めはセラピストが主導であったが、徐々にＳ児が主導して遊びが展開されるようにもなった。人形は主にＳ児の行為の対象として扱われた。中期は、ままごと以外のごっこ遊びが活発にみられ、役割交代ができる、審判をするなど、２つの役割についての理解が明確になった。そして、“する側”の役への定着が見られた。場所を移動する、作って遊ぶなど、短い見通しをもって遊びが展開され、プレイルーム全体で遊ぶようになった。この時期は、Ｓ児が主導となってシナリオを進めること遊びが多く、人形は行為の主体として操作する遊びが多くみられた。その中で、人形を関係付け、対話させ、それに伴いセリフも増えていった。後期は、関係の中で遊びが展開し始めるという特徴がみられた。それまでＳ児が主導で進められていたが、セラピストの提案を取り込んで遊びが展開されるようになった。また、シナリオの中に３つの役割が登場するようにもなる。ひとり遊びもみられるようになり、一人二役のセリフも明確になった。

以上の結果から、日常的なテーマから、絵本や短いシナリオに基づいたテーマへ遊びが移行し、役割の理解、３つの役割がみられた。人形を使った遊びは、テーマが結合された遊び、シナリオを作って展開する遊びに用いられることがわかった。